

聖書:ダニエル書7章1～15節

説教:人の子が来られる

はじめに

ダニエルは、彼の三人の友人たちとともに補囚となつてエルサレムからバビロンに連れて来られ、その後歴代の王に仕えるという生涯を送ることになります。しかし神を信じる者にとって、それは決して平坦な道のりではありません。あるときは、三人の友人たちが、王の命令に反して王が建てた金の像を拜まなかったことから火の燃える炉の中に投げ込まれることがありました。ダニエルもまた、王以外の者に祈る者は処罰されるという禁令を破ったことから獅子の穴に投げ込まれたこともありました。しかし、彼らが神に信頼し続けた結果、炉の中や穴の中から無事に戻ることができ、これを見た王が神をあがめる、全国民に対して信仰を証しするという事も起きました。ダニエルたちの信仰がいかにすばらしかったのか、このことだけ見てもよくわかるでしょう。それが6章までのあらすじです。

今日はその続きの7章の前半を開いています。ダニエルは、寝床で不思議な夢と幻を見た後、15節でこう語っています。「私ダニエルの心のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は私をおびえさせた。」先取りして28節も読みます。「ここでこの話は終わる。私ダニエルは、いろいろと思ひ巡らして動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。」

すばらしい信仰者であったはずなのになぜダニエルは動揺したのでしょうか。今日はそのことを見ていながら、神の救いについて考えていきます。

1 ダニエルがしてきたこと

1) 彼が仕えた王

1節を読みます。「バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。」

ダニエル書にはたくさんの王さまの名前が出て来ますので、整理します。ダニエルがバビロンに連れて来られたとき、彼が最初に仕えたバビロンの王がネブカドネツアルです。それからおよそ五十年経ち、次にバビロンの支配者となったのがベルシャツアルです。そのベルシャツアルはダレイオスに殺され、ダレイオスがメディア・ペルシャ帝国の王となります。6章はこのダレイオスにダニエルが

仕えていたときのことが書かれています。では7章は誰のときのことか。ベルシャツアルの元年とあります。「あれ?」と思いませんか。7章に入ったら、時間が昔に逆戻りしています。なぜこのような書き方をしているのでしょうか。きっと理由があるはずですよ。

2) ネブカドネツアルが見た幻を解き明かす

ベルシャツアルの元年ということは、ネブカドネツアルから交代したばかり。そのネブカドネツアル王のとき何があつたか。彼は二度にわたって幻を見ています。いずれもダニエルが呼ばれて幻の意味を説き明かしをし、特に二つ目の幻のときは、ダニエルの語ったとおりのことが王の身に起きたので、彼の解き明かしの確かさがこれでわかるわけですよ。

2 ダニエルが見た幻

1) 四つの獣

では今日の箇所に戻り、ダニエル自身が見た幻についてはどうだったのか。この幻は前半と後半に分かれていて、前半には四つの獣が登場します。特に獣の描写に関しては、例えば四つの鳥の翼が出て来たり、十本の角が出たりしますので、それがどんな意味なのか皆さんも大いに興味が湧くところかもしれません。確かに学者の間でもいろいろな議論があるようです。けれどもこれはあくまでも幻ですから、深く追求してもあまり意味がない。むしろ全体の流れを大づかみに見た方が正しい理解の助けになると思います。

2) 年を経た方、人の子のような方

そこで9節から幻の後半に移るのですが、がらりと様子が変わります。御座に座られた「年を経た方」によるさばきによって、大言壮語する口を持った第四の獣は殺され、燃える火に投げ込まれます。そして13、14節になる。「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

私たちはここを読み、「年を経た方」とは父なる神のことであり、「人の子のような方」とはイエス・キリストのことであると気がつきます。イエスは福音書の中でご自分のことを「人の子」と呼んでいるのも、おそらくこのダニエル書のこの箇所が関係していると言われています。

3) 動揺するダニエル

ダニエルが見た幻とネブカドネツアルが見た最初の幻を比べると、細かな所は違いますが、大枠では非常によく似ています。これだけ似ているのですから当然ダニエルは解き明かすことができると予想します。実際はどうか。15節。「私ダニエルの心は私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は私をおびえさせた。」意外なことに、ダニエルはこの幻を見て落ち込んでしまった、とあるのです。なぜなのか。意味がわからなかったはずはありません。ネブカドネツアルの幻は完璧に解き明かしたのですから全部意味を理解しています。それでも悩むというのであれば、逆に考えなければならない。ダニエルの知りたかったことが幻にはなかった。そう考えてみるのです。いったい何を知りたかったのか。

3 神の救い

1) ダニエルが知りたかったこと

その答えを知るヒントは9章2節にあります。「私ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことによって、エルサレムの荒廃の期間が満ちるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。そこで私は、顔を神である主に向けて断食をし、粗布をまもって灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた。」

この後、ダニエルは10章で再び幻を見ます。そのときは幻を解き明かせるようになっていく。ということは、ダニエルにとって9章のことがいかに大きなことだったかということになる。

ダニエルがなにのことで苦しんでいたか。ここでわかります。エルサレムが荒廃したままなのか、それとも回復されるのか。それがダニエルにとって大きな問題だったことになる。どうしてそこまで苦しむのか。私たちにはピンとこないかもしれませんが。

2) 荒廃したままのエルサレム神殿

話しはダニエルがまだエルサレムにいたときにさかのぼります。ある日、ネブカドネツアル王がエルサレムに攻めてきて、神殿にあった宝物をごっそりとバビロンに持ち帰ってしまいます。それ以来神殿

は荒れ果ててしまう。こうなったのは、南ユダ王国の歴代の王たち、特にマナセと呼ばれる王が犯した罪に対して神がさばきを行った結果だと第二列王記21章に書いてあります。ダニエルは祈るときにいつもエルサレム神殿に顔を向けて祈るほど彼にとって神殿は大切だった。その神殿が荒廃したままであったことを気にかけていた。そういうふうに見えます。ところが幻にはその答えがいつい出て来ない。それでダニエルは苦しんだ。どうも、そういうことのようにです。

でもすっきりしません。ダニエルは幻で、人の子のような方が最後の日に永遠の国を打ち立ててくださるのを見えています。神殿が回復されるのかどうかわからなくても、人の子が来られて最後のさばきの日のことがはっきりとわかっているのだから、それで十分ではないか。そのような反論をしたくなるかもしれません。

3) 主のよみがえりは本当にあるのか

では、イエスご自身は神殿のことにに関してどのように語っていたでしょうか。ヨハネの福音書2章19節にあります。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」このことに対してヨハネが21節で「イエスご自分のからだという神殿について語られたのであった」と説明しています。このことから、神殿がイエスのからだを現していることは明かです。

ダニエルは神殿が荒廃してしまった、壊された。それは回復するのか。それともしないのか。回復するとするならばいつなのか。それを知りたかった。それは、私たちにわかりやすいように言い換えればこういうことになります。イエスの御からだは十字架で裂かれ、いのちをお捨てになられ、墓に葬られた後、イエスはいったいどうなるのか。ダニエルはそれを知りたかった。そのような意味となります。もしも仮に神殿の回復がないというのであれば、イエスのよみがえりはないということになり、罪が赦される道もないということになる。最後のさばきの日が来ますよと言われても、それだけでは、救いは完成しない。これは信仰の根幹に関わる重大な問題です。だからダニエルは真剣に悩んだ。ダニエルはすべての幻と夢を解くことはできませんでした。でもだからと言って、願ったとおりの幻を見たのではなかった。皮肉なことですが、幻を解き明かすことのできる賜物があるがゆえに、彼だけが味わわなければならなかった苦しみということかもしれません。

4) 救いを待ち望む心

私たちは、この聖書に本当の救いといのちがある、そう信じて信仰者になりました。でもあるとき、ある人たちが別のことを言い始めるのを聞いて、何が本当なのかと混乱することがあります。白か黒かすっきりと判断できればよいのですが、そうはいかない。そこで長い間悩むことがあります。実際私の中でもそういうことがありました。なぜかすぐに白黒つかない。なぜ、いつまでも苦しまなければならぬのかと訴えたくなることもあります。

計算してみるとダニエルは二十年近くこのことで悩んだ末に、やがて預言者エレミヤが書いたものを読んだとき、初めて自分が知りたかったことを教えられていきます。その間はつらかったでしょう。でもそこを通されるのです。ダニエルは、神により頼むすばらしい信仰者だったので、すべてわかっていました、知っていました、ではない。彼はすばらしい知恵と能力と霊的な賜物を持った人でしたが、そんな人でも理解できないことがあって苦しんでいった。それは無駄な苦しみだったのでしょうか。

世の人たちは、苦しむことに意味がない、そんなことは無駄だと言います。本当でしょうか。十字架を見てください。十字架こそ世の人の目にはもっとも意味のない苦しみにしか見えません。でも主の苦しみがあるからこそ、私たちは救われていくのです。人の目には無駄で意味のない苦しみであるのに、神はその苦しみを大切な救いに変えてくださるのです。

であれば私たちが通っていく苦しみも同じではないのか。今は恵みが見えなくても、苦しみをとりながら神の御真実に近づいているのかもしれないのです。

ダニエルはそんな道を通ります。ひとりぼっちではありません。主が伴っています。主ご自身が私たちと苦しみをともにしてくださいます。